

# 台湾と中国における渡辺淳一文学の翻訳について

## —『失樂園』を中心に—

姚 紅

### 一 はじめに

男女の性愛を赤裸々に描いた『失樂園』『愛の流刑地』などのベストセラーで知られる直木賞作家の渡辺淳一が死去したというニュースは、日本中のみならず、2014年5月5日に台湾と中国国内にも伝わった。数万人のネットユーザーがミニブログやSNSアプリを通じ、渡辺の死を悼み、彼の独特な創作を振り返った。渡辺が絶大な人気を博した理由としては、渡辺文学の頂点とも言われる『失樂園』の存在が挙げられる。

『失樂園』は、1995年から翌年にかけて『日本経済新聞』に掲載され、1997年2月に講談社から単行本として刊行された。上下巻を合わせた年間発行部数は267万部で、1997年度の年間ベストセラーランキング・フィクション部門第1位となった。上下巻共に十三章で構成され、「落日」「秋天」「良夜」「短日」「初会」「冬滝」「春陰」「落花」「小満」「半夏」「空蟬」「至福」「終章」が含まれている。作中の大胆で過激な性的描写などが話題を呼び、その後流行語大賞を受賞するなど、一大ブームを巻き起こした。

『失樂園』が単行本として日本で出版された翌年の1998年に、中国と台湾で訳者が異なる中国語訳『失樂園』が出版された。譚玲訳『失樂園』（台湾台北：麦田出版社、1998年1月）と竺家榮訳『失樂園』（中国珠海：珠海出版社、1998年5月）である<sup>(1)</sup>。譚玲訳『失樂園』は、版權を取得した香港の天地圖書出版社と北京の文化芸術出版社によって、1998年4月に香港と中国国内で同時に刊行された。竺家榮訳『失樂園』は、出版された当初は過激な性的描写が削除されたが、2010年4月には削除された内容が殆ど補完され、全訳版として作家出版社によって発行された。渡辺が死去した後、渡辺作品の版權を取った北京聯合出版社は6月に竺家榮訳『失樂園』全訳本を記念版として出版した。

本稿は、各訳文の優劣を論じるものではなく、台湾・中国で刊行された『失樂園』の中国語訳に焦点を合わせて、渡辺文学の翻訳をめぐる諸問題について検討していきたい。

## 二 譚玲訳『失樂園』

1998年1月に出版された譚玲訳『失樂園』の初版は、上下巻2冊で20万部を売り上げ、当時のベストセラーとなって、台湾の文壇や出版業にも影響を与えた。『1998年台湾文学年鑑』に掲載された「日本文学のブームが台湾に巻き起った」という文章において、譚玲訳『失樂園』の写真が載せられ、次のように語られている。

近年、台湾社会では日本の流行文化が満ち溢れている。食べ物や服飾からレコードやアニメまで、ほとんどの人が聞いたり見たりしたことがある。日本文化の計画的な輸入により、文化の指標としての出版業もそれに伴って台湾に入ってきた。日本の映画やテレビドラマが台湾に入り、高い視聴率を上げた後、これらの映画やドラマの原作はすぐに出版社によって台湾の市場に導入され、日本書のブームが巻き起こされた。

最初に台湾に入ったのは、日本から広まってきた「失樂園現象」である。(中略)台湾の読者は、映画やドラマが上映ブームとなる中で、原作の小説を読んだ後に作者による男女の性愛の官能的描写に感心した。そのため、「失樂園現象」は台湾に広まり変化していった。(後略)

「失樂園現象」に次いで、台湾の出版社は新たな出版路線を開拓した。日本のアイドルドラマや新進女流作家のシリーズに重点を置き、日本の大衆文学を台湾の読者に薦めようとしている。(中略)日本の新進女流作家は、女性の情欲を強調する描写によって、主に現在の日本社会の女性心理を表している。例えば、直木賞を受賞した林真理子の『禁果(原題:不機嫌な果实)』や高樹のぶ子の『熱愛(原題:熱)』など。(拙訳、本稿の中国語資料も特に明記しない限りすべて同様。)<sup>(2)</sup>

『台湾文学年鑑』は、1996年より発行され、その年の台湾文壇の様相を映し出したものである。上述の「日本文学のブームが台湾に巻き起った」では、ファッション・アニメ・映画・ドラマなどの日本の大衆文化が多岐にわたって台湾に浸透している中、「失樂園現象」が注目されていることを指摘している。台湾における「失樂園現象」の流行りの発端となったのは、映画『失樂園』とドラマ『失樂園』の上映である。森田芳光監督の映画『失樂園』は1997年5月10日に日本で公開された。ドラマ『失樂園』はよみうりテレビの制作で1997年7月7日から9月22日まで、日本テレビ系列で全12回放送され、平均視聴率20%を超えるヒットを記録している。同年『失樂園』の映画とドラマが台湾でも上映され、話題になり、原作に対す

る関心が高まった。映画やドラマの上映後に出版された譚玲訳『失樂園』は「失樂園現象」を促した。すなわち、小説『失樂園』が映画やドラマといった媒体が混合された状態で受容されたともいえるだろう。一方、中国語訳『失樂園』の出版は、林真理子や高樹のぶ子のような女性の心理や情欲を描写する新世代の女性作家の作品が台湾に紹介され、日本大衆文学の出版ブームを巻き起こした要因ともなった。上述のように、『失樂園』の翻訳・出版は、台湾における日本文学の翻訳・紹介に重要な役割を果たしたと言っても過言ではないだろう。

譚玲訳『失樂園』は1998年4月に香港で天地圖書出版社によって出版された。香港の評論家である陶傑は、譚玲訳『失樂園』について以下のように述べている。

(前略) 日本の小説家渡辺淳一の長編小説『失樂園』は、今年台湾と香港でベストセラーになった。

これは一冊の官能小説である。本書は最初から最後まで愛に溺れた二人の男女が彼らの配偶者に隠れて不倫をすることを描写しており、大島渚の「官能の世界」の遺風がある。本の中には淫猥で露骨なセックス描写がたくさんある。(中略) 中国語訳『失樂園』の訳者は譚玲といい、名前からみると女性であるに違いない。この訳文はとても素晴らしい。とりわけ「抽拉頂磨」の四文字はその深さを表している。「女體要害被搗中」の「搗」という文字は、千鈞の重みがある。訳者の文字を選ぶ工夫は、「紅杏枝頭春意鬧」といった、古代から口承され褒められている「鬧」という文字の選択からも見て取れる。この女性訳者が翻訳の際にすべての感情を注ぎ込んだので、読者たちには小説の男女主人公の久木と凛子ではなく、日本の作家渡辺淳一氏と台湾の女性訳者譚玲本人が愛を営んでいるように感じられた。不思議なことに、『失樂園』が出版されると、香港や台湾の「評論家」は感服させられ、それを極上な文学作品として尊重し、意外にも陰口を聞いたり、猥褻を口実に批難したりした道学者が一人もいない。情にもろく道徳に厳しい中国の読者は、どのように「抽拉頂磨」のような赤裸々な描写を受け入れたのだろうか。『失樂園』が広く高く評価されたのは、もとより作者の渡辺淳一氏が大学医学部の講師という学術的地位を有しているからである。学術成果を有する作家に対して、中国の読者は格別の敬意を表したのである。(3)

陶傑は、『失樂園』には不倫をした男女の「淫猥で露骨なセックス描写」が数多く描かれているものの、渡辺の「大学医学部の講師という学術的地位」のために、かえって「極上な文学作品」として読者の愛読や評論家の好評を博したことを指摘

している。一方、陶傑が言及している「紅杏枝頭春意鬧」とは、『新唐書』の編集者として知られ、北宋の文学家でもある宋祁（998～1061）が書いた「玉楼春」の名句である。「鬧」という文字は、「にぎやかで、繁雑である」という意味で、咲き乱れるあんずの花を描写し、満ち溢れる春の息吹や詩人の喜びが紙面に躍如としてゐる。陶傑は、「古代から口承され裏められている」詩文を引用し、「すべての感情を注ぎ入れて」文字を選ぶ工夫を払った『失樂園』中国語訳文を高く評価している。

『失樂園』の訳文が「とても素晴らしい」と好評を博した訳者の譚玲は、『紫丁香冷的街道（原題：リラ冷えの街）』（麦田出版社、1998）、『化粧（原題：化粧）』（麦田出版社、1999）など渡辺の作品を訳出している。この訳者の詳細については、従来明らかにされていない。以下のように、ブログ「晴天譯樂園」に掲載されている「異なる樂園へ出発した渡辺淳一（原題：向另一個樂園出發的渡邊淳一）」という文章は注目に値する。

これ（筆者註：『失樂園』）が生死や愛欲を描写する小説であるが故に、私は翻訳の際にとりわけ深い注意を払った。濡れ場は露骨に訳してはいけなし、控えめで曖昧に訳してもいけなかった。結局、自分の心理的な障壁を乗り越えられずに、ペンネームで発表することにした。それにもかかわらず、多くの方はそれが私の訳本であることを知っており、中年・熟年の男性読者が急増した。その中に、香港で簡体字版の『失樂園』を見つけた人が、繁体字版のものと比較しようと興奮して買って帰り、記念にと私に贈ってくれた。この本のおかげで、私は誘われていくつかの読書会に参加した。また、監獄から送られてきた一通の男性読者の手紙（差出の住所が怪しかったため、調べてから分かった）を受け取った。それは、今までで最も感動した読書感想文であった。(4)

この文章は、台湾で渡辺の死去が報じられた2014年5月5日の翌日に発表されたものである。ブログ「晴天譯樂園」の持ち主は翻訳家の陳宝蓮である。彼女は、台湾の輔仁大学日文系を卒業し、文化大学日本研究所で修士号を取得した。東呉大学日文系の講師を経て、『中国時報』の編集翻訳者を務めたが、現在翻訳家として活躍している。彼女は豊富な翻訳経験を持ち、主な訳書には、渡辺淳一『男と女』『マイセンチメンタルジャーニー』のほか、林芙美子『放浪記』、『宮部みゆき作品集3』、吉本ばなな『だれもの人生の中でとても大切な1年』、島田洋七『佐賀のがばいばあちゃん』、沢木耕太郎『深夜特急』、会田雄次『日本の風土と文化』などがある。

陳宝蓮は、自らブログで渡辺の死去に弔意を表しながら、『失樂園』を訳出した

ものの、ペンネームで発表したことに言及している。1998年に台湾や香港で発売された中国語訳『失樂園』は、麦田出版社の譚玲訳と文化芸術出版社の竺家榮訳のみである。1998年から現在まで異なる出版社によって刊行された中国語訳『失樂園』があるものの、譚玲や竺家榮以外の訳者による訳本が見当たらない。2015年7月に筆者が陳宝蓮本人に確認したところ、彼女は自ら訳した『失樂園』が麦田出版社によって出版されたものだとして認めた。つまり、陳宝蓮が「譚玲」というペンネームを使って中国語訳『失樂園』を麦田出版社によって出版したのである。ブログでも言及したように、プロの翻訳者であるものの、あえてペンネームで発表した理由は、原作に多く含まれている露骨な性的描写にある。

また、陳宝蓮がブログで言及しているように、譚玲訳『失樂園』の簡体字版は香港でも売られていた。ここで問題になるのは、なぜ読者が譚玲訳『失樂園』の繁体字版と簡体字版の異同に興味を持つのかということである。前述したように、香港の天地圖書出版社と北京の文化芸術出版社は、1998年4月に香港と中国国内で譚玲訳『失樂園』を同時発売した。香港は1997年にイギリスから中国に返還され、香港特別行政区になったが、中国国内と異なっており、台湾と同じように繁体字を使用している。それ故に、天地圖書出版社から出版された譚玲訳『失樂園』は繁体字版となっており、文化芸術出版社から刊行された簡体字版の譚玲訳『失樂園』は、主に簡体字を使う中国国内の読者を対象とする。以下では繁体字版と簡体字版の違いを見ていきたい。

台湾と香港で出版された繁体字版の譚玲訳『失樂園』（図1・図2）は上下二冊となっているが、中国国内で発売された簡体字版（図3）は一冊となっており、初版で三万冊発行された。興味深いのは、香港で出版された『失樂園』の表紙には「全譯版」と掲載されている点である。つまり、中国国内で刊行された簡体字版の譚玲

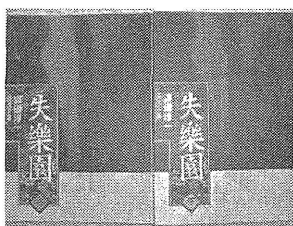


図1：繁体字版の譚玲訳『失樂園』（台湾：麦田出版社、1998年2月）



図2：繁体字版の譚玲訳『失樂園』（香港：天地圖書出版社、1998年4月）



図3：簡体字版の譚玲訳『失樂園』（北京：文化芸術出版社、1998年4月）

訳『失樂園』が全訳ではなく、抄訳であることが示唆されていると思われる。実際、文化芸術出版社は、作者の渡辺に相談したうえ、原作の三万字ほど「加工」や「必要な文学的処理」<sup>(5)</sup>を行ったと主張している。「加工」とは、原作で描かれた過激な性的描写に対して削除や伏せ字の「……」といった処理のことである。一方、「必要な文学的処理」とは、性に関わる表現の箇所を婉曲化、簡略化の翻訳方略を用いたことである。最も多く見られたのは、繁体字版で「性愛」という言葉を用いた箇所だが、簡体字版で「情愛」と書き直され、性的関係に基づいた愛情を情意のある恋愛や愛情に変化させる処理である。そのほかに行われた「必要な文学的処理」については、いくつかの代表例を以下に挙げていく。括弧の中は筆者による直訳である。

例1 原作：たしかにその瞬間、凜子は円く可愛いお臀を振って、狂ったように行き果てた。<sup>(6)</sup>

繁体字版訳：那一瞬間凜子渾圓可愛的臀部確實狂搖劇撼地到達高潮。<sup>(7)</sup>

(その一瞬、凜子は狂ったように円く可愛いお臀を振って激しくオーガズムに達した。)

簡体字版訳：那一瞬间凜子的表情确实是既贞静，又狂热，混合成一种独特风情。<sup>(8)</sup>

(その一瞬、凜子の表情は奥ゆかしくもあり、狂ったようでもあり、一種独特な色気を混じり合わせた。)

例2 原作：逆らいはしたが、凜子は結局、思いきりお臀を突き出し、久木はそれをさまざまな言葉で愛でて鬨り、そして最後に結ばれる。<sup>(9)</sup>

繁体字版訳：凜子雖然抗拒，但終究盡情翹起臀部，久木用各種言詞挑逗后一舉挺進。<sup>(10)</sup>

(凜子は抵抗したが、結局思いきりお臀をあげて、久木はさまざまな言葉で戯れてから一気に凜子の中に入った。)

簡体字版訳：凜子虽然抗拒，但抵不住久木用各种言词挑逗。<sup>(11)</sup>

(凜子は抵抗したが、久木のさまざまな言葉の戯れに耐えられなかった。)

例3 原作：そのまま、久木が凜子の乳首を弄び、凜子の手が久木のものに軽く触れている。<sup>(12)</sup>

繁体字版訳：久木揉弄凜子的乳頭，凜子輕撫久木的下體。<sup>(13)</sup>

(久木は凜子の乳首を撫で遊び、凜子は久木の下半身を軽く撫でている。)

簡体字版訳：久木和凛子相互轻抚。(14)

(久木と凛子は互いに軽く撫で合っている。)

以上の代表例で示している通り、台湾で出版された繁体字版の譚玲訳『失樂園』は原作に忠実な逐語訳であるが、極めて明快でわかりやすい文章である。一方、文化芸術出版社で刊行された簡体字版の譚玲訳『失樂園』は、繁体字版で訳出された性器や性行為に関する箇所意図的に削除・婉曲化・簡略化など処理をすることで、原作の露骨な性的イメージを緩和している。なぜ出版社はわざわざそのような処理を行う必要があったのか。その要因としては、以下で論じる竺家荣訳『失樂園』の初訳と同じように、中国国内の文化・政治情勢が挙げられる。

### 三 竺家荣訳『失樂園』

中国において、渡辺は大江健三郎と村上春樹とともに「現代日本文学の三大家」と言われ、現代社会における人々の生き方・死の意味・性愛に関心を寄せて追究した作家として高く評価されている<sup>(15)</sup>。初めて中国に翻訳・紹介された渡辺の作品は、『光と影』である。陳喜儒訳『光和影』は1984年第2期『日本文学』に紹介され、1986年に沈陽春風文芸出版社によって出版された。その後、1986年から1993年にかけて翻訳作品数は17点に上るが、1994年から1997年まで一冊も翻訳されていなかった。渡辺の作品が大いに注目を浴びようになったのは1998年からである。

1997年7月に刊行された雑誌『博覧群書』には、「現代日本の婚外恋小説およびその社会背景(原題:現代日本的婚外恋小説及其社会背景)」という文章が掲載され、『失樂園』は柳美里『家族シネマ』や林真理子『不機嫌な果実』とともに「婚外恋小説」として紹介されている。そして同年12月の『譯林』の「世界文壇の動態」には、「『失樂園』が日本のベストセラーになった」と題した文章が掲載され、『失樂園』の粗筋が紹介されている。1998年5月に珠海出版社によって竺家荣訳『失樂園』(図4)は出版された。



訳者の竺家荣は北京の国際関係学院で日本文学や文学翻訳の授業を担当する大学教員で、研究分野は近現代日本文学である。1998年『失樂園』の翻訳をきっかけに、谷崎潤一郎、川端康成、三島由紀夫や大江健三郎などの作品を含め、現在に至るまで30冊余りを翻訳している。

図4: 竺家荣訳『失樂園』(珠海出版社、1998年4月)

1998年4月に北京の文化芸術出版社から譚玲訳『失樂園』の簡体字版も出版されたが、それは台湾で刊行された繁体字版を大幅に削除・改作したものである。それ故に、一か月遅れて刊行された竺家榮訳『失樂園』が中国国内で初の簡体字版となる。竺家榮は、翻訳経緯について次のように振り返って述べている。

1998年偶然にも、珠海出版社から頼まれて『失樂園』を翻訳する機会を得た。内容を読んでみると、性的描写が意外に多いと感じた。知っている限りでは、日本文学の中においてもこれほど性愛描写が多いものはない。

当時、私は渡辺淳一の初期の医学小説を日本語で読んだことはあったが、日本でよく売れた『ひとひらの雪』などの情愛小説は読んだことがなく、この作家についてはまったく知らなかった。そのため、私にとってこれが長編小説を翻訳するにはまたとないチャンスであったにも関わらず、あれこれ心配してしまった。編集者は、「審査に通らなければならないので、出版社のほうも訳者に『曖昧な表現』で翻訳するよう求める」と繰り返して説明してくれた。私は覚悟を決め、しぶしぶ翻訳を引き受けた。決定を下した時の苦しさは、今でも記憶に新しい。出版社の心配のほかに、訳者としてある程度の「心の負担」を克服しなければならなかったからである。

前世紀の80年代の改革開放、90年代の通信ネットワークの発達、および家庭意識の希薄化にも関わらず、『失樂園』のような性的描写を多く含める作品を導入することは、出版社にとって危険を冒すことである。この作品が門前払いされないために、出版社は訳者に過激な描写を適当に削除するよう求めざるを得なかった。『失樂園』の翻訳は、当時、外国文学を訳すことが厄介であった状況を十分に表している。<sup>(16)</sup>

ここで、前節で述べた台湾の訳者の陳宝蓮の「心理的障壁」と同じように、竺家榮は『失樂園』を翻訳した際に「心の負担」を抱えた。陳宝蓮が抱えた「心理的障壁」とは、原作の性的描写を「露骨に訳してはいけなし、控えめで曖昧に訳してもいけなかった」という問題である。一方、竺家榮は訳し方のほかに中国社会の文化・政治情勢も考慮に入れた。中国では性に関する話題は一種の文化的な禁忌であり、政治的な禁忌である。それ故に、出版社から『失樂園』の翻訳を依頼された際に、竺家榮は「私は大学教師であり、生徒も同僚もいる。もしこのようなものを翻訳したとなれば、今後どう人様に接すればいいというのか。自分の名声がとても心配だった」<sup>(17)</sup>と不安を抱え、遠まわしに断った。

一方、竺家榮も言及しているように、出版社にとっても大胆な性描写の含まれる



『失樂園』を導入することは、「危険を冒すことである」。中国の出版社は、共産党の「中央宣伝部」、政府の「国家新聞出版広電総局（国家新聞出版ラジオ映画テレビ総局）」によって管理されている。1997年2月から2002年2月にかけて実行された「出版管理条例」の第二十五条には、出版禁止の内容が8項目あり、「わいせつ、迷信を吹聴し、暴力を宣伝し、社会良俗または民族の優秀な文化伝統に危害を及ぼす」ものが含まれている。わいせつ出版物に関しては、1988年12月から実行されている「わいせつおよび色情出版物認定に関する暫定規定」の第二条で、「わいせつ行為を吹聴し」、「人々の性欲を煽動し、一般の人に腐敗堕落させ、芸術価値または科学価値のない出版物を指す」と定義され、性行為をみだらで具体的に描写する出版物など7項目が挙げられている。一方、第四条では、わいせつな内容が含まれながらも芸術価値のある文芸作品、人体美を体現する美術作品、解剖・出産など性に関わる自然科学知識はわいせつ出版物ではないと規定している。この類の作品の出版は新聞出版署の鑑定、許可が必要となり、違法な出版社は直接責任を問われる。

厳しい出版審査を通るために、珠海出版社は竺家榮に「過激な描写を適当に削除するよう」求めた。そのため、「しづしづ翻訳を引き受けた」竺家榮は『失樂園』に書かれた性に関する描写を「曖昧な表現」で訳出し、「どうしても翻訳するのが恥ずかしい」ような「細やかな描写」を大幅に削除した。それに対して、竺家榮は、「話の筋自体を傷つけてこそいなかったが、多くの部分を削除したことは、渡辺文学の本質と『失樂園』の主題の豊かさに大きな傷を残した」<sup>(18)</sup>と述べた。前述したように、譚玲訳『失樂園』は中国に導入される前に、出版社によって削除・婉曲化・簡略化などの処理が行われた。このように、中国国内に流通した簡体字版の譚玲訳『失樂園』と竺家榮訳『失樂園』は、出版のためにいずれも原作の性的描写を最小限に抑えざるをえなかった。

中国語訳『失樂園』は出版された後、中国国内の読者の中で過熱する人気を博した。そのため、文化芸術出版社は、翌年「渡辺淳一作品シリーズ」を出版し、このシリーズに炳坤・鄭成訳『男人这东西（原題：男というもの）』、芳子訳『泡与沫（原題：幻覚）』、高珊・郁貞訳『一片雪（原題：ひとひらの雪）』、周金強・王啓元訳『夜潜夢（原題：夜に忍び込むもの）』、方闢訳『为何不分手（原題：別れぬ理由）』、虽弓訳『爱如是（原題：愛のごとく）』、丁国旗・秦創訳『雁来红（原題：くれなる）』が含まれている。このシリーズの中で、『くれなる』が女主人公の同性愛や部下との愛などを描いた作品であり、そのほかの六作は不倫を主題とした小説である。中国語訳『失樂園』と同じように、このシリーズは人気が高まり、注目されていた。従来「性」や「不倫」に厳しい中国国内において、「西洋の腐り果てた性自由観念と生活方式を赤裸々に宣伝している」<sup>(19)</sup>と批判した声があったものの、道徳の立

場から渡辺文学を批判した人は少なかった。『失樂園』を含めた渡辺作品が中国で話題となった理由は、1990年代からひそかに変化しつつある人々の性道徳に関する観念にあると思われる。

中国では、『金瓶梅』や『肉蒲団』など露骨に性愛を書いた古典作品や、男女の性行為を描いた春宮図といった美術作品や、房中術を論じた医学著書が数多くあったものの、伝統の儒教倫理道徳や礼儀が強調された時代においては、性を語るのが禁忌となっていた。1920年代の五四新文化運動の最中に、貞操・性愛・道徳をめぐる論争は、はやくも自由恋愛の思潮となって全国の隅々まで広がり、郁達夫（1896～1945）の小説集『沈淪』（1921）のように、性的変態心理が描かれた作品も多数刊行された。しかし、1980年代以前まで性は淫らさと結び付けられ、タブー視されてしまい、性に関わる文学作品や映画は低俗趣味として禁止され、性愛に関わる古代の書物も出版が禁止されるようになった。

1980年代から経済改革開放政策が実施され、中国は飛躍的な経済発展を遂げた。海外との経済的・文化的交流が盛んになるにつれて、西洋の性解放・性革命の潮流も中国に押し寄せ、中国人の性意識に大きな変化をもたらし、婚姻関係以外の性行為に対する世論の態度は変化しつつある。1980年代初期に不倫関係者は「陳世美」<sup>(20)</sup>や「第三者」と呼ばれ、周囲から軽蔑され、職場から警告や処罰をされることもあったが、80年代中期で不倫のことは「婚外恋」（婚外の情事）と呼ばれ、軽蔑のイメージが薄くなった。90年代以降になると、「情人」（愛人）という言葉や、「家里紅旗不倒、家外彩旗飄飄」（家では妻が倒れない赤旗、外では愛人が万国旗）という俗語が流行ってきた。中国における性科学の第一人者であり、上海性社会学研究センターの主任である劉達臨は、1989年2月から1990年4月にかけて全国2万7千人の「性文明」調査を行った。この調査で、既婚者に「婚外恋」の是非を問いかけた質問に、都市部では54%、農村部では44%、半数に近い被調査者は肯定的態度を示した<sup>(21)</sup>。この調査のデータからは、不倫に対する中国人の態度が寛容なものへと変化しはじめたことが読み取れる。

1990年代以降、中国当局が検閲を強化しているとはいえ、インターネットの普及にともなって性愛についての情報や思想が幅広く伝達するようになり、出版物だけでなく、ネット上で自らの不倫や奔放な性体験を語るネット小説も多く現れてきた。この時期、男性作家の賈平凹の『廢都』（1993）や莫言『豊乳肥臀』（1995）のほかに、ドイツ人男性との不倫・奔放な性愛やドラッグを描いた衛慧の『上海ベビー』（1999）や、ロック・ミュージシャンとの出会いとセックス、ドラッグ、そして売春を描いた棉棉の『キャンディ』（2000）や、セックスを趣味とし、ネット上で自らの性遍歴を公開し出版した木子美の『遺情の書』（2003）は大いに注目さ

れた。彼女たちの作品は発禁となったものの、自らの身体を憚ることなく売り物にして小説化する「新人類」作家の登場は、中国の現代文壇に大きな衝撃をもたらしたとされている<sup>(22)</sup>。

このような社会背景の中で、2010年4月に竺家荣訳『失樂園』の全訳本(図5)は作家出版社によって出版された。作家出版社は2008年に十部の渡辺作品の版權を取り、「両性関係読本」「医療普及手帳」「名作小説収集」など三つのシリーズにわけて出版した。その中で、『失樂園』と『男というもの』を除いた八部の作品は、中国で刊行されたことがない渡辺の新作である。渡辺は自ら作家出版社に寄せた手紙の中で、「これらの作品を通して、日本の日常生活や日本人について、より深く理解していただき、今後の日中の文学交流、そして文化交流におおいに役立つ<sup>(23)</sup>」という期待を表明している。



図5:竺家荣訳『失樂園』全訳本(北京:作家出版社、2010年4月)

全訳本は、初訳で簡略化、削除された三万字の箇所を殆ど補完した。出版社は「小説は美しい文字で関連する細部を表現しており、少しも低俗な感じがしない<sup>(24)</sup>」と称賛している。竺家荣は『失樂園』の訳後記で「今のような寛容的で理性的な中国社会であるからこそ、『失樂園』全訳版の出版が実現できた<sup>(25)</sup>」と述べ、中国の社会情勢の変化が翻訳者に与えた影響を認めている。

原作に詳細に描かれた性に関わる箇所では、性と愛に対する渡辺の考え方が多く述べられている。どのようにこのような部分をうまく訳すのかは、渡辺文学を理解するには重要な意味を持っている。そのために、竺家荣は全訳本で「信(忠実)・達(意味の伝達)・雅(表現の美化)」の基準によって言葉の選定に非常に注意を払った。同じ意味でもなるべく異なる言葉で訳し、四字熟語や対句表現や排比句(いくつかの構造の似た語句を並列に並べて、関係する意味を畳みかけるように話していくという修辞手法)を活用し、ロマンチックな「情愛文学」としての『失樂園』の特徴を再現している。例えば、

例4 原作:それにしても、逢う度に深く豊かに変貌していく女の軀とはなになのか。初めのうちこそ、その多彩な豊饒さに感動し、ときに呆然としていたが、いまはそれを越えて、むしろその激しさが不安で不気味でさえある。<sup>(26)</sup>

竺家荣訳:每次相聚时都变化万端的女体实在令人百思莫解。在最初的阶段男人尚能感动、惊叹其绚丽多姿,然而现在已超越了这个界限,女人那旺盛的情欲使人不安,令人生畏。<sup>(27)</sup>

(逢うたびに、変化が窮まりない女の体は何度考えても理解できない。最初の頃、男はその変化に富んで多彩な美しさに感動し驚嘆していたが、いまはこの限界を越えて、女の旺盛な情欲が不安で恐ろしい。)

ここでは、笹家栄は「変化万端」「绚丽多姿」といった四字熟語を使って、凜子の体で起こった変化の激しさを訳出している。さらに、四字熟語の「百思莫解」と排比句「使人不安、令人生畏」と訳されたところは、凜子との不倫に対する久木の困惑や葛藤が伝わっている。

特筆すべきなのは、正確でかつ堪能な翻訳を施しただけでなく、日本文学・文化に関する詳しい注釈を付けていることである。その代表的な例を紹介してみよう。「至福」の章で、凜子と死の約束を交わした後に、死の不安が消え、死への渴望が徐々に高まってきた久木は、近松や西鶴が生きていた江戸時代の心中や情死について想起した。笹家栄訳『失樂園』の全訳本で、近松や西鶴について次のような注釈が書かれている。

近松門左衛門：(1653～1724) 日本江戸時代の浄瑠璃や歌舞伎の劇作家である。生涯にわたって浄瑠璃の台本を110作以上、歌舞伎の台本を28作創作した。代表作は『出家景清』や『曾根崎心中』などある。

井原西鶴：(1642～1693) 日本江戸時代の小説家、俳諧師である。代表作には、俳諧著作の『西鶴大矢数』や『五百韻』があり、恋愛小説の『好色一代男』や『好色一代女』がある。<sup>(28)</sup>

笹家栄は、翻訳の後記「愛と性に対する執着と探索」で、近世の井原西鶴の小説や、近松門左衛門の浄瑠璃・歌舞伎劇本などの「好色物」「心中物」を男女の恋愛を謳う日本の古典作品の最高峰と捉え、『失樂園』が井原西鶴や近松門左衛門の心中を題材とした作品と一脈通じる点があると指摘している<sup>(29)</sup>。『失樂園』の中で言及された井原西鶴と近松門左衛門に対して、細かい注釈をつけたことは、渡辺作品に表れている「愛」と「性」の主題に対する理解を深めるだけでなく、日本文学・文化に対する理解を促進するために重要な役割を果たしていると思われる。このように、細心の注意を払って訳したうえでなお翻訳に入りきれない部分を、紙幅を割いてあますところなく読者に説明・紹介しようとしている日本文学・文化の研究者の笹家栄の姿は、『失樂園』の全訳本でうかがえる。

2014年5月5日に渡辺が死去した悲報を受けて、中国では再び渡辺文学のプー

ムが巻き起こった。『新京報』が発表した2014年5月9日～15日小説ベストセラー・ランキングでは、竺家榮訳『失樂園』全訳本の売上が第七位になった。第一位から第六位までの作品には、二名の中国人作家の小説や、ガブリエル・ガルシア＝マルケスの『百年の孤独』（第一位）と『コレラの時代の愛』（第六位）、カーレド・ホッセイニの『カイト・ランナー』（第二位）およびマイケル・ドブズの『ハウス・オブ・カード』（第四位）が含まれる。このランキングの統計結果は、竺家榮訳『失樂園』全訳本の人気を物語っている。

#### 四 まとめ

性と愛、生と死を主題とし、渡辺文学の代表作といわれる『失樂園』は、1998年に中国と台湾で翻訳・出版されて以来、大きな反響を呼び、ベストセラーになった。渡辺の作品が絶大な人気を博した理由について、文学研究者で北京大学教授の張頤武氏は、「渡辺さんが描く感情は複雑かつ繊細で、日本文化の特色があり、世界共通の内容も含まれている」<sup>(30)</sup>と述べている。

同じ中国語圏の台湾と中国国内では、それぞれの翻訳・出版事情も異なっている。台湾では1987年に戒厳令が解除され、言論・出版が比較的に自由になった。1990年代の台湾における日本の大衆文化の浸透につれて、『失樂園』は台湾に翻訳・出版された。譚玲訳『失樂園』は原作に描かれた大胆で過激な性的描写をノーカットで訳出することができたが、訳者はその訳し方に悩んだ末に、自らペンネームで刊行することを決めた。一方、譚玲訳『失樂園』が繁体字から簡体字に重訳され、中国国内に導入された際には、厳しい出版規制の中で出版社によって性に関わる箇所は削除・婉曲化・簡略化などの処理を意図的に施されていた。

同じ翻訳方略を用いた処理は同時期に出版された竺家榮訳『失樂園』の初訳にも見られる。竺家榮訳『失樂園』の初訳では、性愛描写が大幅に削除され、「曖昧な表現」で訳出されたのは、出版社からの依頼だけでなく、当時の社会状況や伝統的な倫理道德観による訳者の自主規制に起因するものでもあった。

本稿で論じたように、中国と台湾における『失樂園』の翻訳過程では、社会的・経済的・文化的状況からの影響が非常に顕著であり、それぞれの訳者の創意工夫の跡もうかがえる。2010年出版された全訳本で、竺家榮は様々な工夫を凝らし、初訳で大幅に削除された性愛描写を訳出し、原作に近い雰囲気や醸し出している。また、原作に触れられた日本文学・文化に関する細かい注釈や研究者による「訳後記」が掲載されていることから、全訳本は中国の読者に渡辺文学を理解するに欠かせない重要な視点を提供しているともいえよう。

中国と台湾における『失樂園』を含めた渡辺文学の翻訳は、渡辺文学の多様性と柔軟性を反映している。社会状況や訳者の感受性によってそれぞれの訳文には差異があるものの、これほど多くの中国語圏の読者に愛読されてきた渡辺文学が、知らず知らずのうちに中国語圏の現代文学に影響を与えていることは否めない。中国語圏における渡辺文学の変容、特に不倫を題材とした新世代の女性作家の作品に与えた影響については、今後の課題にして考察していきたい。

## 注

- (1) 1998年中国国内の市場で、文化芸術出版社の譚玲訳『失樂園』と珠海出版社の竺家榮訳『失樂園』のほかに、内蒙古出版社と遠方出版と名乗った『失樂園』も発売されていた。『中華読書報』の記者が内蒙古出版社と遠方出版社の担当者に確認したところ、それらの出版物が出版社の名義を盗用して印刷された海賊版であることが判明した。『『失樂園』どれが海賊版なのか（原題：《失乐园》谁是盗版）』（『中華読書報』1998年7月8日）（引用は<http://www.gmw.cn/01ds/1998-07/08/GB/206%5EDS115.htm>により、2015年10月7日閲覧）を参照。
- (2) 吳鴻玉「日本文学のブームが台湾に巻き起った（原題：日本文學掀起熱潮）」、李瑞騰編『1998年台湾文学年鑑』、台湾行政院文化建設委員会出版、1999年、178～179頁。
- (3) 陶傑「大作家のエロティカ許可書（原題：大作家的情色執照）」（初出：『明報月刊』1998年8月）、『万象』編集部編『情色天天』、中国：遼寧教育出版社、2011年。
- (4) 2015年7月23日閲覧<http://bijinluck.pixnet.net/blog/post/41080045>。下線は引用者による。以下同。
- (5) 『『失樂園』どれが海賊版なのか（原題：《失乐园》谁是盗版）』、『中華読書報』1998年7月8日。
- (6) 渡辺淳一『失樂園 上』、講談社、2014年、253頁。
- (7) 渡辺淳一著・譚玲訳『失樂園 上』、台湾：麦田出版社、1998年、214頁。
- (8) 渡辺淳一著・譚玲訳『失樂園』、北京：文化芸術出版社、1998年、154頁。
- (9) 渡辺淳一『失樂園 上』、講談社、2014年、前掲書、256～257頁。
- (10) 渡辺淳一著・譚玲訳『失樂園 上』、台湾：麦田出版社、1998年、218頁。
- (11) 渡辺淳一著・譚玲訳『失樂園』、北京：文化芸術出版社、1998年、156頁。
- (12) 渡辺淳一『失樂園 下』、講談社、2014年、56頁。
- (13) 渡辺淳一著・譚玲訳『失樂園 下』、台湾：麦田出版社、1998年、48頁。
- (14) 渡辺淳一著・譚玲訳『失樂園』、北京：文化芸術出版社、1998年、239頁。
- (15) 趙愛華「生存・死亡・性愛——三人の代表作家から見る現代日本文学の行方（原題：生存

- 死亡・性愛——从三位代表作家看当代日本文学走向)、『世界文化』第4期、2006年4月。
- (16) 竺家荣『『失樂園』の翻訳：原作の味わいを伝えるよう心がける（原題：翻译《失乐园》力求传达原作韵味）、中国作家網  
(引用は <http://www.chinawriter.com.cn/bk/2014-06-09/76329.html> により、2015年9月10日閲覧)。
- (17) 劉智慧「翻訳家竺家榮は初めて『失樂園』を依頼された時：私は遠まわしに断った（原題：翻译家竺家荣第一次拿到《失乐园》，我婉拒了）」、『申江服務報』2014年5月14日（引用は [http://newspaper.jfdaily.com/sjfwdb/html/2014-05/14/content\\_1166725.htm](http://newspaper.jfdaily.com/sjfwdb/html/2014-05/14/content_1166725.htm) により、2015年10月4日閲覧）
- (18) 林芳「渡辺淳一は北京で全訳本の発売記念サイン会『失樂園』が作家自らの経験に起源する（原題：渡辺淳一亮相北京签售全译本《失乐园》源自作家亲身经历）」、『広州日報』2010年4月26日B4版  
(引用は [http://gzdaily.dayoo.com/html/2010-04/26/content\\_943176.htm](http://gzdaily.dayoo.com/html/2010-04/26/content_943176.htm) により、2015年10月11日閲覧)。
- (19) 王明輝『『失樂園』の喪失（原題：《失乐园》的失落）」、『中国性科学』2001年12月第10卷第4期、42頁。
- (20) 一般的な京劇の演目として上演された『秦香蓮』の登場人物である。宋朝仁宗の時代、湖広荊州の貧しい読書人の陳世美は、妻の秦香蓮に後事を託して科挙を受けるために都に赴く。科挙に合格し、皇女を妻にした陳世美は、糟糠の妻秦香蓮が邪魔になり、殺そうとする。からくも逃げ延びた秦香蓮は、当時公正無私で情け容赦なく悪人を裁く名判官である包拯に陳世美の罪を訴える。包拯はすでに皇族であることを頼みに開き直る陳世美を捕える。皇太后と皇女は権力を盾に圧力をかけるが、包拯は自分の免職、ひいては死罪を覚悟で陳世美の斬首を命令する。
- (21) 劉達臨著・森田靖郎訳『中国13億人の性』、講談社、1998年、12頁。
- (22) 桑島道夫『『新人類』作家の登場—身体で書く女性作家、衛慧、棉棉、そして木子美……』、国際交流基金2004年度第2期アジア理解講座「中国現代文学を味わう—驚異的経済成長下の文学はいかに」、3頁。  
(引用は [https://www.jpj.go.jp/j/project/culture/archive/cross/lecture/asia/pdf/04-2asia\\_thu.pdf](https://www.jpj.go.jp/j/project/culture/archive/cross/lecture/asia/pdf/04-2asia_thu.pdf) により、2015年5月6日閲覧)。
- (23) 渡辺淳一著・竺家榮訳『失樂園』、作家出版社、2010年。
- (24) 同注17。
- (25) 竺家榮「愛と性に対する執着と探索（原題：爱与性的执著探索）」、渡辺淳一著・竺家榮訳『失樂園』、作家出版社、2010年、429頁。
- (26) 渡辺淳一『失樂園 上』、講談社、2014年、243～244頁。

- (27) 渡辺淳一著・竺家荣訳『失楽園』、作家出版社、2010年、157～158頁。
- (28) 同注25、401頁。
- (29) 前掲書、432～434頁。
- (30) 「渡辺淳一さんの中国との縁、現代日本への理解を促進」、中国網、2014年5月6日  
(引用は [http://japanese.china.org.cn/jp/txt/2014-05/06/content\\_32300770.htm](http://japanese.china.org.cn/jp/txt/2014-05/06/content_32300770.htm)、2015年10月18日閲覧)

### 参考文献

- 尹永順「中国語訳『鍵』のイデオロギーによるリライトについて—性にかかわる表現を中心に—」、『通訳翻訳研究』第11号、2011年
- 于桂玲「『失楽園』はどう読まれるのか—中国における渡辺淳一文学の受容—」、『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』第7号、2010年10月。
- 王志松「90年代出版業のマーケティングと情愛描写——日本の翻訳文学との関係（原題：90年代出版業の市场化与情色描写——与日本翻译文学的关系）」、『日語学習与研究』2010年第4期。
- 康東元「中国現代社会と村上春樹・渡辺淳一の翻訳小説——日本文芸の中国における受け入れ方(2)」、『図書館情報メディア研究』第3巻1号、2005年。
- 王輝「改革開放以降の中国人の性意識の変容およびその形成要因についての考察」、『NUCB journal of language culture and communication』、2004年1月。